

大阪は「まち」がほんまにおもしろい



「救民」決起！大塩平八郎の乱を辿って ～幕末は大塩から始まった～

大塩平八郎は、寛政5年(1793)に大坂東町奉行所与力・大塩敬高の子として誕生、御番方見習を経て、26歳で与力となりました。文政13年(1830)に理解のあった上司の奉行・高井実徳が転勤すると養子・格之助に与力職を譲って私塾「洗心洞」の講義に専念。何もなければ清廉潔白の陽明学者として生涯を終えたかも知れませんが、時代は平八郎に峻烈過酷な使命を与えました…。江戸幕府230年の太平の世を打ち破り、「幕末」の到来を告げた男の生涯に迫ります。

◎天保の大飢饉

稲刈り時期に雪が降ったというほどの異常気象が原因で天保の大飢饉(1833～1839)が起こりました。餓死者は30万人を越え、全国各地で一揆や打ち壊しが多発。大坂では奉行所の役人たちは堂島米市の米を江戸に送って幕府の機嫌取りに奔走し、また豪商たちが米を買占めたので、米価は6倍にも跳ね上がり、市中でも餓死者が出る有様でした。平八郎は東町奉行・跡部良弼に対して蔵米(幕府が保管する米)の開放や、豪商の米買占め中止を要請しましたが跡部は拒否。それもそのはず、実は跡部自身が豪商と癒着して利を貪っていた張本人でした。やむを得ず平八郎は蔵書1000冊を売却して得た600両で施しを行い、さらに豪商・鴻池に自分と門人の禄米を担保に1万両の借金を申込みましたが、これは跡部の根回しで拒絶されました。

◎檄文

自分の力の限界に悩み苦しんだ平八郎は、ついに天保7年(1836)12月、「大坂城の米蔵を打ち壊す!」と反乱を決意。堺で鉄砲を買い付け、高槻藩からは大砲を借り受けました。翌年(1837)1月の連判状には30余名の門下生(うち与力、同心11名)の他、農民、職人、医師、神官など、あらゆる職層の人間が名を連ねました。また近隣の農村に「四海困窮いたし候はば天禄長く絶えん。小人に国家を治めば災害並ると、昔の聖人深く天下後世の、人の君人の臣たる者を誅め被置候(世の中が困窮すると天は絶える。能無し的人物に国を任すと災害が襲い掛かると古の聖人も後世の君臣に戒めている)から始まる檄文を送りつけ、「下民を悩ましめ候、諸役人共を誅戮致し、引続き奢りに長居候、大坂市中金持の町人共を誅戮可致候(中略)金銀銭並諸蔵屋敷内へ隠置候俵米、夫々分散配当致し遣し候」と、庶民を苦しめる役人や奢り昂ぶっている悪徳商人に天誅を加え、隠し金銀や米を与えると伝えました。大坂市中に火の手が上がれば参戦して欲しいと要請し、貧民たちも密かに手番を整えました。

◎救民!

いよいよ蜂起の2月19日の早朝、突如、門弟与力2名が裏切り、奉行所に事の次第が発覚しました。平八郎は一刻の猶予もならないと午前8時に「救民」の旗を掲げ、わずか25名で武装蜂起。洗心洞に火を放ち、与力朝岡宅(夕刻に跡部が立ち寄る予定でしたが朝は不在)に砲弾を撃ち込みました。その後、鴻池、三井呉服、米屋平右衛門、亀屋市郎、天王寺屋五兵衛を襲撃。近隣からも貧民たちが駆けつけ、難波橋を南下した頃には300名もの大集団に。しかし正午になると準備を整えた幕府軍2000名が本格的に反撃を開始。大塩軍は大量の砲撃を浴びて淡路町に退き、夕刻には鎮圧されました。

① 成正寺(じょうしょうじ)

大塩平八郎と平八郎の養子・格之助の菩提寺です。江戸時代は大罪人の大塩親子の墓は許されず、明治半ばに、ようやく子孫の手で建立されました。空襲で破壊され、昭和32年(1957)に復元。平八郎に大砲を撃ち込まれた朝岡家の墓もあります。

② 蓮興寺

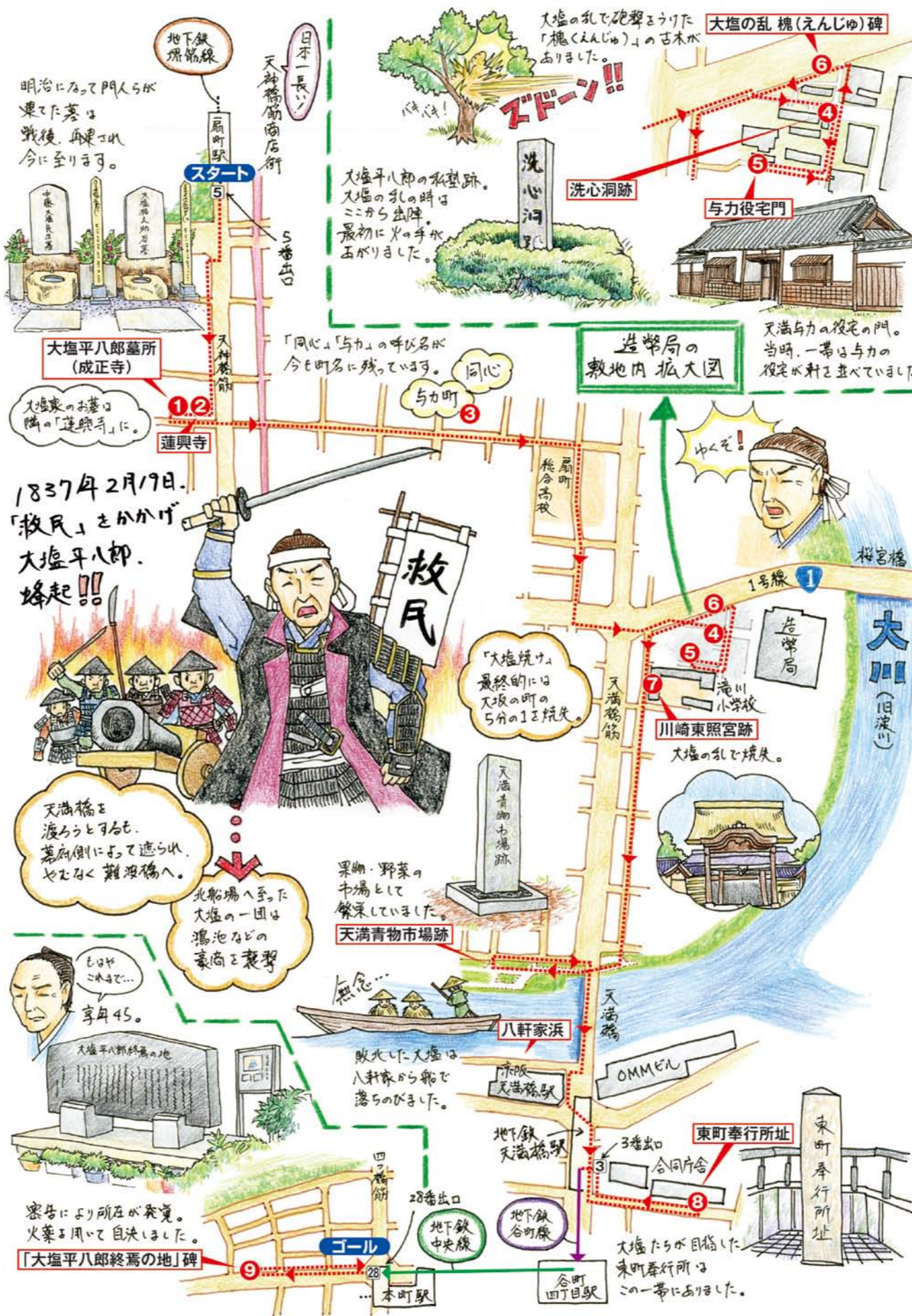
平八郎の祖父(政之丞)の先妻と後妻、平八郎の父(敬高)の妻の墓があります。寺前には大塩家墓所の石碑が建てられています。

③ 与力町・同心

江戸時代、大坂には町奉行(東町・西町)が置かれました。奉行にはそれぞれ与力30騎、同心50人が仕え、多くが当地に住んだので、その名残で現在も地名「与力町」「同心」が使用されています。

④ 洗心洞跡と「知行合一」

平八郎の私塾・洗心洞跡です。講堂と塾舎があり、塾生は40～50人いたといわれています。ここで平八郎は「知行合一」(知って行わないのは知らないのと同じ)を説く行動的な陽明学を講義しました。禁欲的な平八郎は与力時代には午前2時に起床して潔斎と武芸に励み、朝食後の5時に門弟に講義。その後に出動して夕方には就寝…といった生活を送っていました。友人の頼山陽(1780～1832)は平八郎を「小陽明」と称賛しつつも「君に祈る。刀を善(ぬく)い、時に之を蔵せよ」と、平八郎の直情的な性格を諷めています。



⑤ 与力役宅門

東町奉行所与力・中嶋家の役宅門です。かつて当地には数多くの与力宅が並んでいましたが、現存するのはこれのみです。

⑥ 槐(えんじゅ)跡

大塩屋敷向いの与力・朝岡助之丞の裏庭には槐の木があり、平八郎が撃ち込んだ砲弾の第一発が打ち込まれました。乱後も約150年の長きにわたって生き続けましたが、昭和59年(1984)、車の排ガスの影響で枯死。伐採されました。

⑧ 東町奉行所

平八郎、平八郎の理解者であった奉行・高井実徳、平八郎と敵対した奉行・跡部良弼が勤務した奉行所です。西町奉行所は現在の「マイドームおおさか」のところにありました。

⑨ 大塩平八郎終焉の地碑

半日で鎮圧された大塩の乱でしたが、大塩親子の行方は不明でした。幕府は摩耶山や六甲山、白山まで捜索を行いましたが見つからず、「もはや海底を探しても分からない」と噂されました。当初は「不届き者の放火」で事件を処理しようとした幕府でしたが、それでは片付けられなくなり、ついに大塩の乱の顛末を全国に通達。騒ぎは急拡大し、幕政に不満を持つ民衆たちに大きな衝撃を与えました。その頃、大塩親子は大坂近郊各所に潜伏していて、じつは決起前日に当時の6名の老中宛に決起の志と改革の必要を書いた書状を送り、それが届くことを期待していました。反乱の真意を伝えることで幕府の自浄作用を期待したわけです。ところが飛脚が勝手に中身を読んで金目のものでないのに書状を捨て去り、老中たちには届きませんでした。そうして書状が届くのを待つうちに、油掛町の手拭職人の美吉屋五郎兵衛に潜伏中と密告され、与力同心に囲まれた大塩親子は覚悟を決めて火薬を用いて爆死。平八郎享年45歳、格之助享年27歳、天保8年3月27日(1837年5月1日)のことでした。大塩の乱の処罰者は750人にも及び、重罪者31人、うち6名自害、20名ほどは拷問で獄死しました。大塩親子と門弟の遺体は塩漬けにされ、すでに死亡しているのにも関わらず、見せしめとして、大坂市中で露屍に処されました。

◎大塩焼けと大塩さま

大塩の乱による火災は翌朝まで続き、2万軒(市中の5分の1)を焼いて「大塩焼け」と呼ばれました。しかし、民衆は家が焼失しても恨まず、むしろ「大塩さま」と手を合わせたといいます。自分たち民衆を救うために平八郎が死を覚悟して幕府に反逆したことをよく理解していたのでしょう。怒った幕府は市中の大塩賛同者10数名を逮捕したといいますが、農民たちは従わず、逆に写筆して密かに近隣の村々に配って幕府への反感を募らせていきました。

◎大塩、死せず!

爆死した大塩親子の遺体は顔の判別が不明でした。そこで「あれは幕府の偽者で大塩さまは生きています」という生存説が流れ、支持者も拡大しました。早くも大塩の乱から2ヵ月後には広島・三原で「大塩門弟」を名乗る一揆が起こり、半年後には越後で国学者・生田万が反乱(生田万の乱)を起こしています。こうした大塩共鳴者の反乱は相次ぎ、幕府なものぞ、という時代の風潮が形成されていきました。大塩平八郎が死んだ年(1837)は西郷隆盛7歳、大久保利通5歳、木戸孝允、坂本龍馬は2歳。この頃から幕府統治の様々な矛盾が噴き出し、一気に時代は「幕末」へと向かっていきました。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩き資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930(財団法人大阪観光コンベンション協会内) 「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。 <http://www.osaka-asobo.jp> または [大阪あそ歩](#) でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。